

# Nyāya Sūtra 2. 2. 66 の解釈について

長 尾 睦 司

1. 単語が表示する意味対象は何かという主題<sup>1)</sup> について、ニヤーヤ学派の定説を示すものとして必ず言及されるのが Nyāya Sūtra 2. 2. 66: vyakty-ākṛti-jātayas tu padārhaḥ (しかし、個物と形相と類が単語の意味対象である。) である<sup>2)</sup>。しかし、このスートラの解釈は新正理学 (Nyāya-nyāya) では一定しておらず、研究書にも混乱がみられる。それ故、本稿では、17世紀の新正理学者 Jagadīśa Tarkāṅkara<sup>3)</sup> と Gadādhara Bhaṭṭācārya<sup>4)</sup> の記述を中心にして、新正理学にみえる諸解釈を整理・報告しておきたいと思う。

2. Nyāya Bhāṣya に依れば、個物 (vyakti) と形相 (ākṛti) と類 (jāti) は、類によつて規定されたものが詮表される (jātivīśiṣṭamabhidhiyate) とする基本的立場からすれば、就れも単独では単語の意味対象たりえず、実際にはその三者全てが意味対象を構成することを結論的にのべるのがこのスートラである。それでは、個物と形相と類の関係はどうであるか。Nyāya Bhāṣya は、三者の就れが主要素 (pradhāna) であり、就れが従属要素 (aṅga) であるかを決定する明確な規則はないとしつつも、pradhāna-aṅga 関係が実際の使用例に即して考えらるべきであることを次のように示唆している<sup>5)</sup>。——例えば「牛が起上る、臥す、横たわる」という表現の如く、話者の意図が差別をのべることにあり、かつその表現によつてもたらされる認識が特殊相に関係する (viśeṣagati) 場合は、個物が主要素であり、他の二者は従属的である。それに反して、「牛は常住である」という表現の如く、話者の意図は差別をのべることになく、しかもその表現によつてもたらされる認識が一般相に関係する (sāmānyagati) 場合には、主要素は類であり、他の二者は従属的である。また、「粘土製の牛」という表現の場合は、牛性なる類

1) この主題についての概観は、G. Sastri: The Philosophy of Word and Meaning (Calcutta, 1959) chap. 7 をみよ。

2) このスートラの番号は edition により異り、2. 2. 66 から 68 までである。筆者は G. Jhā の edition (Poona Oriental Series No. 58, 1939) に依っている。

3) Śabda Śakti Prakāśikā (Kashi Skt. Ser. 109, 1934) 使用。(略号 ŚŚP)

4) Śakti Vāda (Kashi Skt. Ser. 57, 1927) 使用。(略号 ŚV)

5) The Nyāya Darśana (Chowkhamba Skt. Ser. 1925) p. 425. l. 5-p. 426, l. 1.

は本物の個々の牛に存するのであり、模像としての牛は形相によつてのみ牛といわれるのであるから、形相が主要素であり、他の二者は従属的である。Nyāya Bhāṣya は大略以上のようにのべているが、要するに、実際の言語表現において三者の就れかが強調されるのは他の二者が欠如しているからではなくて、その文脈中では他の二者が有用でないからであるという観点から、個物と形相と類が単語の意味対象を構成すると解されているのである。そして、基本的にはこの解釈がニヤーヤ学派において継承されてゆくのである。

3. 新正理学では、単語が或る意味対象を表示するその機能的関係 (śabdavṛtti) として二種類が是認されている。即ち、śakti と lakṣaṇā とである。前者は単語がその直接的・本来的意味対象 (śakya) を表示する関係であり、後者は単語がその間接的・比喩的意味対象 (lakṣya) を表示する関係である。そして、単語 (pada) は本来前者を有するもの (śakta) とされる。かくて、単語の śakti 関係がいかなる意味対象との間に成立するかという点から冒頭の主題は考察される。

さて、新正理学におけるこのスートラの解釈は三つの系統に分類される。第一の解釈は伝統説 (sampradāya) として言及されるものであり、次の定型で提示される<sup>6)</sup>。

(1) jāty-ākṛti-viśiṣṭa-vyaktau śaktiḥ (類と形相によつて規定された個物を、単語は直接表示する。)

Jagadīśa に依れば、この伝統説は、スートラに “padārthaḥ” と単数がのべられている事実にもついで、類と形相と個物の三者に対して一つの śakti を想定するものであるが、この限りでは実質的に Nyāya Bhāṣya 以来の解釈と大差ない。しかし、定型 (1) にみる如く viśeṣaṇa-viśeṣya 関係を明瞭に適用している点は発展的である。Gadādhara はこの点を一層明確にしている<sup>7)</sup>。即ち、彼は、類と同様に形相も単語の意味対象の規定要素 (viśeṣaṇa) であるとして、意味対象 (śakya) の規定要素に差別があつても śakti が一つであることに支障はないと明言し、さらに、“jātyākṛti-viśiṣṭa” について、viśeṣaṇa-viśeṣya 関係を決定する要因がないから「一方によつて規定された他方によつて限定されたもの (ekaviśiṣṭāparāvaccinna)」に対して śakti があると解釈してはならないという。それでは、二つの規定要素の関係はどのように解すべきか。彼は、直接的に類と形相の両者

6) 例えば、Viśvanātha (Nyāya Siddhānta Muktvāli ad. kār. 81, KSS 6, p. 280, ll. 1-2)。しかし、その註釈 Dinakari は新説を採る。

7) ŚV (pariśiṣṭakhaṇḍa) p. 193, l. 1f.

を認識特徴 (prakāra) とする経験上周知の認識はありえないとして、例えば「粘土製の牛」という表現の如く形相のみによつて規定されたもの (kevalākṛtīviśiṣṭa) に対して単語「牛」の意図 (tātparya) がある場合には、牛性のみによつて限定されたもの (śuddhagotvāvacchinna) に対して lakṣaṇā を想定しなければならないとしている。この様に、伝統説では二つの規定要素の関係を lakṣaṇā の導入で解決しようとしている。

第二の解釈は新説 (navya) として言及されるものであり、Jagadīśa の立場でもある。それは次の定型で提示される<sup>8)</sup>。――

(2) jāti-viśiṣṭa-vyaktau śaktiḥ (類によつて規定された個物を、単語は直接表示する。)

Jagadīśa に依れば、類と個物に対して一つの śakti を想定するこの解釈の典拠もスートラにある単数記述に求められるという。しかし、定型 (2) には “ākṛti” なる語はみられない。この点について Jagadīśa は注目すべき記述をしている。即ち、「形相なる相の形態 (saṃsthāna) は独立に (pṛthak) 単語の意味対象 (śakya) である。そして、形相と個物は一つの単語から想起されるけれども、意味対象は「牛」等という語によつて異つた文脈結合 (bhedaṇuaya) から理解される。語分解 (vyutpatti) は多様だからである。それ故、形態の想起なき場合は、牛性のみを認識特徴 (prakāra) とする個物の認識が、śakti によつてもたらされるのである。」<sup>9)</sup>ここに、形相が独立の意味対象とされている点は従来紹介されていないところであり、注目してよいであろう。

新説では以上のように形相と個物には各々 śakti があるが、類には別個の śakti はない。Jagadīśa はこの間の事情を、単語の意味対象は何らかの属性によつて限定されたもの (kiṃciddharmāvacchinna) であることが原則であるから、純粋な牛性 (śuddhagotva) 等に対して śakti を想定するのは不可能であるとのべて<sup>10)</sup>、類は個物の規定要素としてのみ śakti に関しうるにすぎないことを確立している。

第三の解釈は Gadādhara の立場であり、彼の Śaktivāda から引用すれば次の

8) 例えば, Annam Bhaṭṭa (Tarka-Dīpikā ad. Tarka Saṃgraha §59, Bombay Skt. Ser. 55, 1918), Jagadīśa (ŚŚP, p. 103, ll. 2-3)。

9) ŚŚP (p. 129. l. 3-p. 130, l. 1): ākṛtirūpan tu saṃsthānaṃ pṛthageva śakyaṃ, śakyaṃ caikapadopasthāpyayor apy ākṛtivyaktyor bhedaṇvayabodhanaṃ gavādiśabdena, vyutpattivaicitryāt, ata eva saṃsthānānupasthitau kevalagotvādīprakāreṇa vyakter avagamaḥ śaktyaiva sampadyate。

10) ŚŚP p. 130, l. 5-p. 131, l. 1.

如くである<sup>11)</sup>——

(3) taddharma-tadvaiśiṣṭya-tadāśrayeṣu triṣv eva śaktiḥ (特定の属性とそれの結合関係とそれの所依というその三者をこそ、単語は直接表示する。)

この解釈は、Jagadīśa が彼の師 Rāmabhadra Sārvabhauma (16世紀末) の解釈として記すところに一致する。Jagadīśa は、彼の師が Nyāya Sūtra に対する未出版の注釈書 Nyāya Rahasya でとる解釈を、次のように紹介している。即ち、「スートラにある“ākṛti”という語は、形態 (samsthāna) を表わすものではなくて、作具に語分解すること (karaṇavyutaatti) によつて“ākāra-nirūpaka” (認識の様相を条件づける要素) を意味するところの、類と個物の間の結合関係 (saṃsarga) を表わすものである。そうでないと、Gotama 仙は、内属関係 (samavāya) も結合関係という仕方で単語「牛」の意味対象であるのにそれに言及していないので、劣つていくことになつてしまうからである。」<sup>12)</sup> Jagadīśa は以上のように師の解釈を紹介しているが、ここに“ākṛti”という語を“ākriyate anena”と語分解して、類と個物の結合関係の意に解釈している点が注目される。Gadādhara は定型(3)にみる如くこの点を明瞭のべており、Rāmabhadra の解釈と同じ立場にあると考えられる。

この解釈に依れば、「瓶」という単語の意味対象を明確にする限定要素 (śakya-tāvachedaka) は、個物たる瓶と類たる瓶性とその両者の内属関係の三者である。ここでは、新説においてはまだ保持されていた形相という意味対象は全く除去されて、純粹に viśeṣaṇa-viśeṣya 関係が適用されているのが特徴的である。

4. 要約すれば、単語の意味対象について Nyāya Sūtra 2. 2. 66 は類と形相と個物を挙げるが、新正理学ではこのスートラは三様に解釈される。即ち、単語の意味対象は、第一の解釈では類と形相に規定されたものとしての個物であり、第二の解釈では類によつて規定されたものとしての個物である。ここでは形相は独立の意味対象とされる。第三の解釈では類と個物とその結合関係が意味対象を構成する。これら三つの解釈の間には、スートラが単語の意味対象の構成要素として挙げる形相 (ākṛti) の取扱いに各々差異がみられる。

11) ŚV (sāmānyakhaṇḍa) p. 41.

12) ŚŚP (p. 132, II. 1-5): sautram ākṛtipadam na samsthānaparam, parantu karaṇavyutpattiyā ākāranirūpakārthaṃ jātivyaktyoḥ saṃsargaparam eva, anyathā samavāyāder api sambandhavidhayā gavādipadaśaktyatvena tadanuktyā muner nyūnatvāpatteḥ.